

病人以外は何らかの使役に服した。

十二月一日、十二月に入つてやつと人の肩につかま  
つて毎日医務室へ治療を受けに行く。

正月用にと米や缶詰等を炊事場にストックしている  
のがソ連側にバレて問題となり、一遍に全部各人に配  
給して、正月まで各自保管することになる。話しても  
わからぬことが多い。

通訳はソ連側には未だおらず、もっぱら日本側の通  
訳が担当していた。日本側の通訳はみな優秀で、関東  
軍で教育を受けた下士官、兵が主力だった。皆スパイ  
の摘発を恐れて氏名を変えていた。

夜が長くて眠れない。午後四時ころから朝九時ころ  
まで真つ暗だ。灯火がないのでみな暗やみの中で話を  
している。腹が空いて困る。糧秣運搬作業に行く者は  
物入れ（ボケット）やスボンに糧秣を盗んでくる。

毎日舎内外の清掃検査がある。非常に厳しい。

糧秣がますます悪くなる。満州から運び込んだ軍の  
糧秣は底をついたらしい。このころから大豆ばかりだ。  
野菜はワカメに乾燥ワラビ等だった。年の暮れころに

は丸粒のトウモロコシだけになった。これがスーブの  
中に少々あるのが主食だ。

零下三十度近くになると、作業は休みだった。

医務室は設けられてあつたが入室や入院設備は未だ  
ないので、怪我負傷者や病人は各兵舎で治療させてい  
た。

なれぬ気候、作業のため怪我人が多い。気候、環境  
の激変のため特に初年兵、召集兵等の体力、精神力の  
充実していない者の患者が多く発生し、死亡する者が  
多い。

十二月三十一日、本日も平日どおり全員作業に出る。  
虜囚の悲哀を実感する。

昭和二十年の項終わり

## 生地獄のシベリア強制労働

大阪府 近藤 恒雄

国境の町、満州里を失望と不安を満載した列車がシ

ペリア鉄道との接点カリムスカヤの西隣、トリムスカヤに着いたのが二十年十月二十八日夜、日本に帰れるというわずかな希望も雪の中におろされて無惨にも消えてしまった。以来三年を超える強制重労働が始まったのである。忘れもしない、十二月のある日曜日が私の最初の労働であった。

それは、見たことも聞いたこともない、二人引きの大きな鋸を使つての雪中伐採であった。膝まである雪の中、両方から懸命に松の木を切る。ようやく一本を切り倒して、痛い腰を雪の上に伸ばし空を見上げたとき、つらさからか、望郷からか涙がにじんだ十六歳であった。また作業中、寒さのため靴下二枚、防寒靴を履いていても足指先がうずいてくる。凍傷にかかる寸前とわかるが、あえて手当てはしない。少しくらいの凍傷ならかかって入室した方が休める。思惑どおり一週間ほど休めた。極寒期の一週間休みは生きのびるのに大いにプラスになった。

食事当番は初め交代制でやっていたが、そのうち希望者が多くなった。朝晩暗く、よく見えないのをよい

ことに、スूपの実や、飯を外套のポケットに盗み入れる。もちろんスूपやみそ汁の中に汚い手を突っ込んでである。あるとき、某人のポケットを調べたところ、飯やらスूपの実が入っていて、上官にこっぴどくなられた。不運としか言いようがないが、特殊な作業を除いて、一度や二度はほとんどの人が覚えがあったのではないだろうか。浅ましい限りではあるが、当時の状況では、いたし方のないことであつたと思う。

一月、二月になると栄養失調の度が進み、毎朝の伐採場行きは、さながら奴隷の列を見るようで防寒服、防寒靴で雪道をうつむき、ノロノロと重い足どりで歩く姿を想像してください。木の枝が落ちてる「越えな、いかなー」と思いながら足が上がらず、つまづいて転ぶ、一度転ぶと、列に追いつくのに苦労する。走る力もないからである。そのころには、ほとんどの人が十キロから十五キロくらいは体重が減っていた。丸裸で診断を受けるときに見る友人の尻は、くぼみ、皮膚はカサカサで黒ずみ、骸骨が幽鬼を見るようで生地獄の容姿であつた。シラミ、南京虫の総攻撃に遭い、酷

寒の重労働に加えて、食べ物は極度に乏しく、栄養失調は好むと好まざるとにかかわりなく当然の現象であった。従って食べられそうなものは、何んでも前後の見境なく食べた。といっても雪原では食べられそうなものはあまり見当たらない。ネズミの丸焼き、松皮の虫、野草等が栄養源であった。

二十一年春、クラスナヤレーチカ、ペトロシーを経て、二十二年春キルガに移動、駅残留組と別れ、十一キロのラーゲルを過ぎ二十三キロの収容所に入った。

ここでも伐採、枝焼き、材木のトラック積み込み、道路つくり、馬そり運搬、等々、山の労働は、何でも人一倍やった。若かったせいもあって疲労の回復は早いし、また若い少年ゆえにみんなに助けてもらったことも多々あった。二十三キロといえば、当時唯一の栄養源「松の実」がある。伐採現場に着くや、松の太木を見上げて実を探す。ソ連の歩哨が来ないうちに、必死で切り倒して何はともあれ松の実を取る。松笠は直径七、八センチ、長さ十五センチくらいではなかったろうか、それをストープでいり、日曜日等は朝から晩ま

で寝そべって食べるのだが、初めは固い殻で舌が傷だらけ、スープがしみて痛く、味も何も味わえなかったが、なれてくるとソ連人並みに、口にほうり込んで舌の先で殻だけバツと出せるようになった。

二十三年春、キルガ本隊に合流、希望してトラックから材木の積みおろし作業に回してもらい、当時二十三、四歳の若手連中と、花形作業に夜昼なく精いっぱい働いた。このころには、精神的、肉体的にも少し余裕ができ、朝夕にはバーベル上げ等をやって体を鍛えた。あのころは、東山さんの腕っ節の強いのを見て、負けじと頑張ったものである。

十一キロの山にいたとき、キルガから加藤、黒岩、川上氏等がサフキン大尉同行で川マスとりが上がってきたことがあり、私も同行して川に入ったが、余りの冷たさにももの二分もたなかった。だが、みなは一日中、川に入っているのである。三十キロくらい上流に行くと翌日帰りに十一キロで一泊、翌朝魚を確かめると一匹もない。「イタチだろう」ということだったが、どこかの頭の黒いイタチだったかもしれない。

三年の抑留中、多くのソ連人を知った中に、最初の山から最後のキルガまでいたあばたのコールケンという兵士がいた。最初は悪の代表みたいな男であったが、キルガで別れるときは大変よくしてくれた。別れを惜しんで涙さえ浮べたのは彼にも人の情けがあつたのだろう。

終戦と同時に帰国しておれば、こんな悲劇もなかつたものを……と想いつつ

## 一日十円の賃金で塩を

山梨県 中山 嘉明

北朝鮮で終戦を迎えた私は、戦後平壤郊外の三合里収容所に収容された。そしてここに収容された者の多くは後にシベリアへ送られることになったが、私の場合は豆満江を渡って旧満州へ連行された。

満州へ連行される前、三合里ではソ連軍の女軍医の診察を受け、疥せんということで幕舎に設けられた患

者収容所に入院していた。昭和二十一年の四月の初めころ、夜中に入院患者は日本に送還するという命令が伝達された。そして三百人が収容所の門から平壤駅へと向かった。

平壤駅から有蓋貨車に乗り込み、夜中に発車。夜が明けてみると、列車は平元線を走っていた。そしてやがて高原駅に着いた。ここから右へ回れば元山方面へ行く。そして元山から乗船して新潟港上陸かとも思ったが、予想を裏切つて汽車は左へ折れた。そして咸興、興南と停車したが下車の命令は出ない。ついにそのまま北上して清津で停車した。

清津では埠頭に入つて乗船するのかと思つたが、これも期待はずれで咸鏡線を北上し始めた。

北鮮の橋梁、道路は到るところが破壊されていた。列車はさらに北上し、図們江(豆満江)が見えてきた。間もなく鉄橋を渡って図們に入った。いよいよ満州入りだ。ここまで来ても内地に帰るところか、どこまで連れて行かれるのか皆見当もつかない。まるでまな板のコイのようにすべてをあきらめてしまい、汽車がど